

2024.9.20
No. 241

編集・発行人 樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp

URL
<http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535
(郵送年間 2,000 円)



軍備ではなく私たちの暮らしを守って

暑い夏でしたが、爽やかな秋風が吹くようになりました。本州はまだ残暑が厳しいでしょうか。

コロナの流行が収まり、平和集会や反原発の集会が7～8月に集中しました。私も困難を乗り越えてさまざまな集会に参加しました。

8月の新聞記事で、各地で「本読みデモ」を企画した人たちの活動が紹介されていました。駅前や公園に集まって、反戦の思いを伝え、連帯したいと、並べた本を読んでもらうことや、集まった

人たちで話し合う姿がいくつもできたそうです。パレスチナやウクライナのことに関心があってもデモに参加できなくても、自分の意思を表明できますね。

私の通信は、日常生活の中で平和や環境を考えたこと。実際に沖縄やアウシュヴィッツに行って感じたことなどを発信してきました。新聞記事を読んで、私の原点を思い出しました。

一人一人の身近な行動がエネルギー政策の転換に



脱原発を実現させたドイツから学ぼうと、ミランダ・シュラーズさんを迎えた講演会が8月12日に札幌市内であり参加しました。

講演では、ドイツがなぜ脱原発を決めたかについて、政策決定のプロセスに市民が参加したことや、科学的な判断、透明性などをチェックすることの大切さ、自然エネルギーへの投資や購入など一人一人の身近な行動がエネルギー政策の転換につながると語りました。

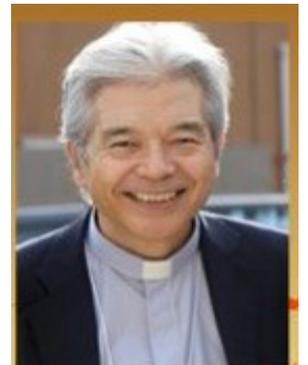
龍谷大学の大島堅一教授は「日本は国民参加のプロセスが全くない」と批判。「地層処分の問題は早急に進めるべきではない」と強調されました。

会場からの質問にミランダさんは「気候変動問題に学生の関心が高いが原発には関心が低い。同じエネルギーの問題として重要性を共有したい。気候がもっと大変なことになる前に再生可能エネルギーを広げる必要がある」と答えました。大島さんは「ドイツのように市民参加が大事と考える議員を増やそう」と提案しました。

自分のできることをしませんか

8月15日に札幌市内の教会で「8.15 札幌平和祈禱集会」があり名古屋から松浦悟郎司教が講演。120人が参加しました。松浦さんは憲法9条を世界の宝に「ピース9」の会の呼びかけ人です。

「日本は過去を見る力を失ってきている。非暴力による平和は無効だと言われると武器を買って基地を作るのが安心だと思う『揺らぎ』が始まる」と指摘。政府は憲法改正があたかも必要であるかのように主張する。「人類はあらゆる戦争をしてきた。無差別に人を殺す兵器が原爆だった」と述べ、さらに「戦争はいきなり起こらない。小さなことで関係が壊れていき、あの国がミサイルを持ちはじめたらこっちも持とうとなる。市民レベルでできることはたくさんある。いろんな国の人たちと出会い、そのつながりが戦争へのステップを止めていく」と語りました。



写真：チラシからの
転載

(文・写真 樋口みな子)

ハンセン病を生きた人のうた

沢知恵ピアノ弾き語りコンサートに心 揺さぶられて



5月に札幌で開かれたハンセン病市民学会がきっかけになり、沢知恵さんが、ハンセン病回復者の支援コンサートを長い間続けていることを知り実行委員会を立ち上げ、7月13日、北光教会チャペルで開催しました。140人近くの人たちで会場がいっぱいになりました。沢さんは満を持して登場。ゴスペルの「アメージンググレイス」から一気に歌に引き込まれました。

「わたしの心は落ち葉です」と歌う2曲目の「こころ」はまるで私のことを歌っているようだと思いました。私は昨年、あまりにも悲しい事が続き、さまざまな行事に参加はしても気持ちがついていけませんでした。言葉をなくしてしまうほどでした。沢さんの歌は言葉が心に響きとても美しい。会場からは歌に引き込まれていく温かい空気が伝わってきました。

次は塔和子さんの詩に曲をつけて歌う。13歳で国立療養所大島青松園（香川）に隔離収容された塔さんの極限の中から生まれた詩は人間の尊厳を問い続けました。その気持ちを表現した「胸の泉に」が素晴らしかったので詩を一部紹介します。

かかわらなければ この愛しさを知るすべはなかった この親しさは湧かなかった この大らかな依存の安らいは得られなかった この甘い思いや さびしい思いも 知らなかった

人はかかわることからさまざまな思いを知る(略) ああ何億の人がいようと かかわらなければ路傍の人 私の胸の泉に 枯葉いちまいも 落としてはくれない

2017年に岡山で開かれた市民学会で、大島青松園を訪れた日を思い出しながら歌を聴きました。塔和子さんを主人公にしたドキュメンタリー映画、宮崎信恵監督の「風の舞」を是非観たいと思いました。沢さんはうたに刻まれた『ハンセン病隔離の歴史』を研究された方です。2022年刊の同名の岩波ブックレットを是非読んでください。

今回は「ハンセン病を生きた人のうた」がテーマで、思いがけなく各地の療養所で歌われてきた「園歌」が紹介されました。大島青松園園歌、松丘保養園園歌（青森）、愛生園挽歌、邑久（おく）光明園園歌などです。「民族浄化」や「一大家族」という言葉に療養所の人たちはどんな思いだったのだろうか。沢さんは、ブックレットの中で「明るいメロディにのせてうたわれる分、かえって違和感を覚えた」と書いています。

沢さんはふだんのコンサートでは「民族浄化」や「一大家族」という歌詞が出てこない節だけを

うたったり、入所者にリードしてもらって部分的にうたったりして工夫をしたと記しています。また、そう思わないでは生きのびることができなかったことも真実であったことに、私はなんとも言えない気持ちになりました。

「愛生園挽歌」の作詞は東京の全生病院（現・多磨全生園）から、岡山の長島愛生園にやってきた黒川眸（ひとみ）です。

「この世にありては共によるこび尊きみよの光の内にこの身の幸をば共にうたひし友らは逝けり遠きみくにに」

常に生と死がとなりあわせにあった療養所で死者を見送り、弔ううたはこの日歌われました。私も亡くなった夫を想いながら聴き入りました。作詞された黒川さんは1年後に25歳で病死したことを沢さんが書かれたブックレットで知りました。

本名を語れず、その家族は、今も差別と偏見に苦しんでいます。沢さんの歌を通して、ハンセン病に対する偏見や差別がない社会になってほしいと強く思います。

最高裁は今年7月に初めて旧優生保護法を違憲とし、国に賠償を命じました。ハンセン病患者もその対象とされ、不妊手術をされました。でも裁判には一人も加わってはいないのが残念です。一人ひとりの尊厳が守られる社会を願わずにはいられません。私は沢さんの歌を聴いて一歩踏み出す勇気もらいました。

（文と写真 樋口みな子）

沢知恵さんと実行委員のみなさん
（撮影・佐竹政治さん）



ワルシャワ蜂起博物館展（札幌では8月9日～30日開催）について

第二次大戦中の最大の悲劇の一つであるワルシャワ蜂起の勃発から今年で80年になることを記念し、また、原爆の投下された広島・長崎とも連帯する意味合いも込めて、広島・大阪・札幌でワルシャワ蜂起博物館展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」が開催されたので報告する。

1. ワルシャワ蜂起(1944/8/1～10/2)とは何か

ナチスドイツからの支配解放を求め、ポーランド国内軍を中心とする抵抗組織がワルシャワ市民も参加して起した反乱である。

ロンドン亡命政府はソ連軍が接近し、解放地域に親ソ政権が樹立されたことを憂慮して蜂起を指令した。蜂起軍5万は市中心部を解放したが、8月上旬にワルシャワ市のヴィスワ川東岸でソ連軍が進撃を停止してルーマニア方面に転進。独軍は態勢を立直し、蜂起軍を守勢に追い込んだ。英米はワルシャワに空輸物資投下以上の救援行動を取れず、一方のソ連は軍事的には反独だが、反ソ的なポーランドの蜂起には非協力的で長期間援助を拒んだ。ソ連軍は9月中旬、ヴィスワ川の独軍の橋頭堡を破壊、若干の援助物資を投下したに止まり、蜂起軍は単独行動せざるを得ず独軍に屈服した。

広島・長崎原爆の1945年と同程度の国内軍2万人、市民18万人、計20万人強の犠牲とワルシャワ市の大規模破壊・亡命政府の弱体化を伴い、ポーランド人に永続的な反ソ感情を植え付けた。

2. ドキュメンタリー『ワルシャワ蜂起』(2014)の上映会と講演会(於北大:8/9)

大変貴重な映像で、よくぞこんな映像が残っていたものだと思う(右の写真はその一場面)。6人のカメラマンが命がけで残したもので、主人公格のご兄弟のお兄さんは殉職されている。弟さんが兄の意志を継いで、フィルムを残したものであり、ソ連に批判的なので、1989年に「連帯」が政権を取るまでは公開できなかったと思う。

吉岡潤津田塾大教授による講演会は、ワルシャワ蜂起の歴史的意義を述べたものだ。ポーランドの歴史には3回の共和制と2回の国家消滅がある：

【第一共和国】(ポーランド・リトアニア共和国：1569-1792) → ポーランド分割による国家消滅：1795-1918

【第二共和国】(1918-1939) → ロシア革命後の共和国成立とナチスドイツの侵略による国家消滅：1939-1945

【第三共和国】(1989～現在) ポーランドは1945年にドイツから一応の独立を果たしたが(ポーランド人民共和国)、ソ連の傀儡政権にすぎず、真の独立は1989年に「連帯」が政権を奪取して初めて達成された。

ポーランドは以上のような歴史を持つことから、国の独立は、ポーランド国民にとって永遠の悲願である。

1940年、ポーランド軍の将校や知識人ら2.2万人が虐殺された「カティンの森事件」が発生し、ソ連への強い不信感があったのにも関わらず、ソ連軍がヴィスワ川東岸に達した時、その援軍を当てにして蜂起したのは、余りにも甘い判断と過度の期待・矛盾があったと言わざるを得ず、それが悲劇を大きくした点は否めない。しかし、ポーランド国民の強い自由への希求は尊重されねばならない。戦後、大きな困難を乗り越えてワルシャワの街が再建され、旧市街が世界遺産として登録されたのも、その意志と関係が深いと思う。

3. ワルシャワ蜂起博物館展オープニング記念式典

8月8日、札幌市資料館で開かれたオープニング記念式典において、北海道ポーランド文化協会会長である安藤厚北大名誉教授にポーランド共和国外務大臣より「ベネ・メリト」名誉勲章がワルシャワ蜂起博物館長の手で授与されたことは、私ども同会会員にとっても大きな喜びとするところである。この他、8月18日には「午後のポエジア」と称する朗読会が開催され、今年は広島・長崎も想起した反戦詩が朗読され、参加者による平和への深い祈りが捧げられた。

(リュミエール池：北海道ポーランド文化協会運営委員)



国内軍の支配地域(1944年8月4日) [*印は映画『地下水道』(1956)の舞台、右上は展示会ポスターより]

長沼一審判決 50 周年記念集会記録集が出来ました

2024 年 5 月

1973 年 9 月 7 日、日本国憲法で保障された「平和に生きる権利」を確認し、自衛隊の実態審理を行い「自衛隊は戦力に当たり、憲法違反」と判決した長沼一審判決から 50 年を記念して昨年 9 月 9 日長沼一審判決 50 周年記念集会が開かれ、その記録集が出来ました。

集会は皆さまのご支援ご協力で無事終了し、その感動を皆さまと共有したいとの思いで記録集を企画致しました。種々の事情で発行が遅くなりましたが、やっと発行することが出来ました。

長沼一審判決から 50 年が経ち、当時公判や援農に参加された多くの方が残念ながら亡くなられました。ただ当時の福島重雄裁判長、弁護団の内藤功弁護士、恵庭事件被告の野崎健美さん、長沼現地農民の藪田亨さん、芦別事件被告（妻）の井尻光子さんなど、ご高齢にもかかわらずご参加頂けた事は幸いでした。

ウクライナ・パレスチナでの戦闘はやまず、世界の人々にとって「平和に生きる権利」の重要性が改めて問われています。

その様な中で、日本国憲法の「平和に生きる権利」を確認した長沼一審判決の意義はますます重要となっていると感じ、この記録集を発行致しました。

日本と世界の平和を考え、日本国憲法の「平和に生きる権利」と九条の行く末を案じている方々に読んで頂きたくご紹介致します。

少部数の発行にて恐縮ですが 2000 円とさせていただきます。(消費税・送料込)

(5 冊以上 1 冊 1600 円、10 冊以上は 1 冊 1400 円と致します)

お申し込みは以下の郵便振替かメールまたは F A X で頂けると幸いです。

住所・電話番号はしっかりお書き下さい。必ず返信致します。

申込み・送金先 郵便振替口座 (恐縮ですが個人口座です)
0 2 7 5 0 - 4 - 7 1 3 2 5 福原正和

申込み連絡先 (以下のどちらかに)

fukinotou@hokkaido.med.or.jp

011-772-8967 (T/F) 福原正和

love9hokkaido@gmail.com

011-252-7483 (F) 北海道憲法共同センター

長沼一審判決 50 周年記念集会実行委員会

記録集編集責任者 福原正和



購読料と寄付をありがとうございます

<2024.7.14~9.8> 敬称略

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535

永井智子 川原茂雄 細川律子 高橋備
小川信之 高木恵子 藤田春美 中川路朋子
津田 孝 齊木登茂子 大橋晃 赤坂京子
甲野恵美 小林千賀子 柴崎徹 阿保亘
宮本紀子

購読料と寄付、合計 53,000 円は印刷と送料に使わせていただきます。

郵送読者の方は年間 (6 回) 2,000 円を郵便振替先にお願ひします。

お薦め本

官邸によるNHK支配の構造を問う

NHKは誰のものか

長井暁著 地平社 2,640円



著者は2001年1月に放送されたNHKのETV特集「問われる戦時性暴力」にデスクとして関わっていた。番組は日本軍による戦時性奴隷制などの性暴力を模擬法廷で裁く女性国際戦犯法廷を取材していた。しかし安倍晋三、中川昭一などの放送前の介入により、番組の改変が行われていたことが2005年に朝日新聞などの報道で明らかになった。NHK内部が動揺する中、著者は単独で記者会見を開き、確固たる姿勢で政治介入を告発した。その後著者はNHKを退職し、フリーのジャーナリストとして活動。大学での講義なども行っている。

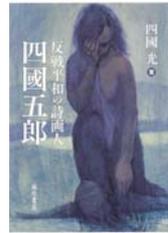
NHKと権力との関係はこの介入事件は重要な分岐点であったのではないか。この介入事件の当事者が首相に就任したあたりから、権力の側はさらにあからさまな圧力・介入を繰り返し、NHKの側は反論、反発の力を失っているように見える。本書はいくつかの事件を例証としてその間の問題を掘り下げる。

取り上げられているのは上記のETV2001番組改編事件のほか、「クローズアップ現代」で郵便局員によるかんぽ生命保険の不正販売を取り上げたところ、郵政からの抗議で続編が放送中止になり、NHK経営委員長がNHK会長を厳重注意したという事件、BS1スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」で画面に登場した五輪反対デモ参加者に対し、「金をもらって動員されている」旨の虚偽のテロップを付けた問題などである。またジャーニーズの性加害問題では番組制作のために事務所に様々な便宜供与をしてきたこと、NHK局舎内が性加害の現場となっていた事実なども取り上げられている。こうした各事件に際し、局内でどのような力学が働き、どのような論法で対処されているかを著者は詳細に検討し、NHKという組織が公共放送の本来の使命からは遠く隔たり、あるべき理念から逸脱していることを追及している。

公共放送とは何か。NHKは受信料を存立基盤とするところから商業放送とは異なる存在であると自らを規定する。しかし、では公共放送とはいかなる責務を担い、どのようなサービスを提供し、どうあらねばならないのかを明示していない。依拠しているのは「豊かで良い放送」や「政治的に公平であること」と言った放送法のあいまいな表現のみであり、それらの条項の曖昧性を曲解した政治家の発言や介入にまともな反論が出来ていない。公共放送とは何か。どのようなサービスを提供する責任があるのか。これらの問題については技術革新による多チャンネル化で放送を巡る環境が大きく動いた1980年代を中心に各国で精密な議論が行われた。日本でも詳細な議論が行われてきており、あるべき姿は明瞭に示されている。しかし現在のNHKはそうした先人の議論を全く無視して運営されている。その故に「NHKは誰のものか」という著者の問いかけはずしりと重く響く。(石川旺)

戦争の惨禍を描いて、書いた人生の軌跡

反戦平和の詩画人
四國五郎



四國光著 藤原書店 2,970円

広島から満州へ従軍し、終戦と同時にシベリア抑留となり、過酷な捕虜生活を送る。気が合った弟は被爆死。絵画と詩作で反戦平和を訴え続けた四國五郎。悲しみと激しさを抱えて生きた詩画人を、息子である著者が父の足跡を辿りました。

四國さんにとって、絵を描き詩を書く行為は、反戦平和のメッセージを社会に届けることでした。

光さんは父について『『誰にでもわかりやすく、戦争の醜さや平和の尊さを描く』という父の表現方法は、最も大事なことを、理屈ではなく、肌感覚として絵を見る全ての人に確実に伝えようとして、必然的にたどり着いた父なりの決して『譲れない表現のあり方』だったのだと思う』と書いています。

絵の才能があり、画家として生きる道があったにも関わらず、自分の描いた絵は、平和運動に活用されました。無償で提供したというのも徹底していました。息子光さんは父を「外出時は画材道具を持参し、常に何かを書いて、描きまくっていた。声を荒らげた覚えが全くないほど物静かな父は、外では反戦平和の闘士」と書き、そのギャップがユニークです。峠三吉の詩と四國の絵で作った「辻詩」、絵本『おこりじぞう』は名作です。

長い時間をかけて読み終え、四國五郎さんの全身全霊をかけて絵や詩で平和の尊さを訴え続けた生き方に感銘を受けました。

10月13日に江別のドラマシアターでもで開かれるパギヤン(趙博)の一人芝居「四國五郎と弟・直登」を観に行きます。(樋口みな子)

ガザ市民の立場で伝える

ガザからの報告 現地
何が起きているのか

土井敏邦著 岩波ブックレット
693円



すでに4万人の命が奪われているガザの人々。そこで暮らす人々は明日への希望もないのかと胸が痛みます。

土井敏邦さんは「オスロ合意」が結ばれた1993年直後にパレスチナを訪問。それ以降ガザに何度も足を運び、難民キャンプの家族や町の人々らの声に耳を傾けてきました。「一人ひとりの人生を見ずにガザの人たちの痛みを感じることはできない」と語っています。

しかし報道はイスラエル軍のジェノサイドについては書いていますが、ハマスが犯した罪についてはあまり触れていないように思います。

土井さんは2023年ハマスの10・7攻撃を批判しています。それがテロであると同時にガザ住民の「植民地支配・占領からの解放」につながるどころかかえって遠ざけてしまったと述べ、その結果がもた

らしたガザの甚大な被害だったと述べています。

イスラエルに追い詰められたパレスチナ側。その抵抗運動としての、ハマスの攻撃と私も思っていた一人でした。新聞報道だけでは真実が伝わっていません。

土井さんは、ガザに住む知人のジャーナリストMさんと定期的に連絡を取り合い、現地で何が起きているのか。その報告がリアルです。Mさんは「イスラエル軍は残忍な軍隊です。あらゆる場所を破壊している。しかしハマスにも責任がある。なぜならハマスがそれを始めたから」と答えています。

収集されずにあふれかえるゴミ、避難先で広がる感染症、夜中に泣き叫ぶ子どもたち、病院の遺体から金品を盗む人たち……。自宅をイスラエルに砲撃され、弟を失ったMさんは「ガザは終わった」と語っている。その絶望感をひしと受け止めました。

土井さんはハマス、PLO主流派「ファタハ」などの指導者たちは、イスラエルの植民地主義支配・占領からパレスチナを解放するために、現実的に、そして長期的に何が可能か、何をなすべきか、という将来を見通す冷徹なビジョンを持たないまま、その展望のない「闘い」の中で自ら腐敗し暴走してしまったのではないかと述べています。

真のガザの解放は占領からの解放を実現すること。一刻も早い解決を祈る思いで願っています。

(樋口みな子)



野生の動植物と向き合っ

伊藤健次の北の生き物
セレクション

伊藤健次著 北海道新聞社
2,200円

自然写真家、伊藤健次さんのフォトエッセイ。長い旅路の中で会う動物たちの写真とそこで蓄積されていく物語。

ヒグマ、エゾシカ、シャチなどの動物41種と貴重な植物21種。北海道の原風景が残る極東ロシアの取材も交え、著者ならではの視点で知られざる野生の営みに迫っています。

森の主クマゲラの項では「コロコロと軽快な声。黒い鳥影が木立をよぎる。苔むし、枝の折れたトドマツに、利尻の森の主のようなクマゲラがいた」。岩場の住人ナキウサギの項では「寒冷な土地を求め、高山や冷涼な風が流れる『風穴地帯』の岩場に逃れて生き延びてきた。近年、地球は温暖化が懸念されている。今の生息地以上に北海道の山野で寒冷な場所は見当たらない。引っ越し先のないナキウサギは、この変化に適応していけるだろうか」と心配する。野生のリズム、キセキレイの項では「広い湖面に飛び出した倒木は、小さな生き物たちのよりどころだった。それはどこか、私たち自身の姿に似ている気がした」と書きます。写真と文章を読むと、動物たちの声が聞こえてくるようでした。

素晴らしい自然に思いを馳せさせてくれる一方で、それが今この瞬間も、深刻な気候危機にさらされていることを思わずにいられません。本書は北海道の自然を温かい目で伝えてくれます。ロシア極東へ北海道の原風景を探す旅も興味深い。(樋口みな子)

登山歴50有余年、集大成に身近な三角点巡り

三角点巡りと
回想の山々



三角点巡りと回想の山々

神原正紀・照子著 自费出版
1,500円

日本山岳会会員である登別市在住の神原照子さんが夫の正紀さんと、山人生の集大成として「三角点巡りと回想の山々」を自费出版しました。

日高山脈の山130座以上を登り「日高辿路」の著書がある照子さん。芦別岳γ(ガンマ)ルンゼ左股奥壁に無雪期・積雪期合わせて3つの初登攀記録を持つなどクライミングの世界で知られた正紀さん。それぞれの激しく厳しい登山の時代から、二人で計17回に及んだ海外登山を経て、この10年は「ラフな登山を」と、夫婦二人で三角点巡りに取り組んできました。



神原正紀さんと神原照子さん(本人提供)

照子さんが「日高辿路」を出版した2005年当時、私は北海道民医連新聞の取材で登別の自宅に伺いお話を聞き記事にしました。印象に残ったのは畳2枚分はありそうな大きな地図で歩いた山を辿ってくれたことでした。それも積雪期も登っているのです。夏山は単独行も多く、私には到底出来ない偉業です。2012年、朝日新聞道内版でユニークな山ガール10人が連載された時に、私が真っ先に推薦したのが神原照子さんでした。山の力はさっぱりないのに私も「原発に反対する山ガール」として取材され記事になりました。

ふたりの人生がさまざまな山に彩られ、困難も乗り越える力になったのではないのでしょうか。著書では日高山脈、海外登山、クライミングなど、厳しい登山の時代の回想をもまとめています。

(樋口みな子)

1部1500円(送料別)で頒布。購入希望者は神原さん宅0143-85-6674までご連絡をお願いします。



足尾のかつての繁栄の数々の遺構と今を伝える

令和・足尾110景

スケッチ・文・翻訳 堀泰雄著
 Horizont出版 1,650円

2020年6月から、友人に誘われて栃木県にある足尾に通い始めた。ここは、明治から大正にかけては、アジア一の銅山で、日露戦争や太平洋戦争の兵器や弾丸などになって、日本の富国強兵政策を支えた。足尾というと渡良瀬川の公害が有名で、田中正造や農民の蜂起、谷中村を水没させて作った遊水地などに焦点が当たるが、足尾町自身は、余り関心と呼ばないようだ。しかし、足尾の町中が本当に面白いのだ。

明治から大正にかけて、足尾は大繁栄を遂げ、最新鋭の機械が導入され、東京からは新しい文

明やモードがすぐにもたらされていた。しかし鉱山はいつかは閉鎖の運命になる。住民は新たな生活を求めて潮が引くように町から去って行った。最盛期には3万8千人もいた人口は今や1300人である。

そして、後に残された近代化遺産(銅山に関する施設機械、工場など)、廃屋になった長屋群、取り残された寺院仏閣、閉山とともに行われ始めた山の緑の復興など、歴史、地理、民俗、自然などあらゆる分野にわたる興味をひくものばかりである。そして、そこに住む老人たちと交流すると、暖かい人間味に感動もする。そんな風にして、まず10景、次に10景と描いてゆくうちに100景を超え、なんと110景になった。昨年2023年は、足尾銅山閉山50周年だ。それには間に合わなかったが、50周年を記念して作ったのがこの本である。

エスペラント・日本語対訳になっている。これもぜひお求めいただきたい。(前橋市・堀泰雄)
申し込みは027-253-2524 又は hori-zonto@r.walter.sannet.ne.jp 堀泰雄さんへ

報道は真実ではなかった

アナウンサーたちの戦争

一木正恵演出

昨年NHKで放映されたドラマの映画版。



太平洋戦争はラジオの開戦ニュースで始まり玉音放送で終わった。奇しくも両方に関わったのが 天才と呼ばれた和田信賢アナ(森田剛)と新進気鋭の館野守男アナ(高良健吾)。

太平洋戦争の最中、日本軍の戦いを支えたのはラジオ放送による「電波戦」でした。日本放送協会とそのアナウンサーたちは、国民の勝利への士気を高めるべく「声の力」で戦意高揚・国威発揚を図り、偽情報で敵を混乱させる。アナウンサーの中には自らが国の扇動に加担しなければならなかった現実に悩み、抗い、苦しみ続ける者もいました。事実をもとにした本作は、放送と戦争の知られざるかわりを描き出す。「声の力」「言葉の力」を前に、当時の人々が突き動かされていくさまが丁寧に描かれます。何より和田を演じる主演の森田剛の演技が圧巻でした。

天才と呼ばれた和田の、時に傲慢なまでの誇りと次第に自分の言葉で真実を伝えられなくなる絶望の狭間であがく主人公の苦しみを自らのものとしていて、観るものの胸に迫ります。原稿を読む無力さに苦悩する和田を妻となった実枝子は叱咤し、「自ら取材した言葉にこそ魂は宿る」と激励します。和田は任された学徒出陣実況のための取材で大学の野球部を訪れます。野球部のエース・朝倉寿喜(水上恒司)たちから本音を聞き出します。「死にたくない」「親や家族と離れたくない」「画家になりたい」誰一人として、死にたくないんだ。その罪深さに葛藤するのです。当日の式典放送を担当する筈だったエースの和田は、当日、どうしてもその原稿が読めずに、席を立ち雨の中に打たれて突っ伏し慟哭する。この映画で伝えたい思いが凝縮した場面でした。(樋口みな子)

独自の文化を築いてきたアイヌの歴史を現代に問う

シサム

中尾浩之監督

「折々のことば」(朝日新聞)で「立ち木はみだりに伐るものではない、流れている水を汚してはいけない」と萱野茂さんの祖母が伝えたとある。アイヌは大事な食糧である鮭を絶やさぬように、家族を養う分だけ獲ってきたのに、勝手な乱獲で激減させた当の和人が法律で禁漁を言い渡すのは「侵略」というほかないと萱野さんは著書で書いています。



江戸時代の北海道。南西にある松前藩は蝦夷(アイヌ)との交易を一手に引き受けていた。松前藩士の次男孝二郎(寛一郎)は兄の栄之助(三浦貴大)と共にアイヌとの交易に向かう。しかし、交易に反発する者に兄は殺されてしまう。

生き残った孝二郎は、アイヌに助けられ、和人と違った文化や風習に触れて理解して行き、己の人生を見つめ直してゆく物語。

白糠を舞台に、当時のアイヌの生活がリアルに再現されています。カジカ汁や鮭の汁もの。驚きはアイヌ語が話されるシーンが随所にあり、アイヌへの敬意が感じられました。孝二郎はアイヌの暮らし方を知る一方で、兄の敵討ちに森の奥に向かうが、和人の圧政に苦しむアイヌの蜂起が高まっていました。兄殺害の真相を知った孝二郎はアイヌを助けようと立ち上がるのです。寛一郎が、顔つきまで変わっていく姿に魅了されました。「シサム」とは「隣人」という意味です。

ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区へのジェノサイド。憎しみの連鎖が止まらない。人と人の不寛容は暴力を生みます。それでいいのかと今の時代に問います。(樋口みな子)

国境超えは命がけ

越境者たち

ギョーム・レヌソン
監督・脚本



極寒のイタリアン・アルプスを舞台に、亡命者の行く手をはばむ厳しい大自然と不寛容な人間たちの狂気、ヨーロッパで実際に起きている恐怖をスリリングに描きます。

リハビリを兼ねて週末を山籠もりをしようとしたフランス人のサミュエル(ドゥニ・メノーシェ)は山小屋に隠れていたチェレー(ザーラ・アミール・エブラヒミ)を放っておけずに亡命目的の密入国と知りつつ、道案内を引き受けます。

妻を亡くして喪失感と罪の意識に苦しむサミュエルと、暗い瞳をしたアフガニスタンからの亡命女性の魂の邂逅は、本作の最も大きな見どころとなっています。サミュエルの知人でありながら、二人を追い詰めて殺そうとする場面には人はここまで残酷になれるのかと心底震えました。チェレーを全力で守りきることで、サミュエルは自分が救われたかったのではないのでしょうか。(樋口みな子)

猛暑が続きましたが、9月半ばから秋らしくなりました。8～9月、山や川の自然や朗読会を楽しみました。それらを写真で記録しました。



シラタマノキの群落に感動！



コケモモ

9月8日、快晴の日曜日、「大雪と石狩の自然を守る会」の寺島一男さんの案内で十勝岳の自然を学びながら、雲の平往復ゆっくり登山を楽しみました。

十勝岳の噴火特性や規模が比較的良く分かっているのは、約4,700年前以降の噴火です。何度も噴火して出来た十勝岳は瓦礫だらけでした。



十勝岳の歴史を語る寺島さん



広大な十勝岳山麓。遠方は芦別岳連山
撮影・寺島一男さん



噴煙で隠れていた十勝岳が姿を現す



雲の平終点で美瑛富士(左)と美瑛岳が美しい



9月6日夕方、ドリアン助川さん(写真)の講演と朗読会が時計台ホールでありました。会場はほぼ満席。私はスタッフとして会場準備と本の販売を手伝いました。

ドリアンさんといえば、「あん」が有名ですね。この本を生み出す迄に10年かかったと言うお話から始まりました。映画のシーンを思い出しながら聴きました。「なにかを為すためではなく、『見るために、聞くために人は生まれてきた』のだと感じたとき、世界全体が徳江さんに(あんの主人公)に飛び込んできた」のです。そこの朗読に涙が出ました。世界24カ国で翻訳、フランスでは4つの文学賞を受賞したことなどが、よく通る声で熱く語られました。ドリアンさんのサイン入り著書も飛ぶように売れました。

8月25日、小野幌教会でチェンバロの演奏を楽しみました。

チェンバロは繊細で優しい音色で、バッハやビバルディが活躍したバロック時代に盛んに使われた楽器です。奏者の小原道雄さん(写真)は名古屋在住で、ポルトガルやドイツ、イタリア、日本各地で演奏活動をされています。私は生まれて初めてチェンバロの演奏を聴きました。札幌でチェンバロのある会場はありません。今回は山本葉子さん(中央写真)の愛用されているBASICルッカーズ一段鍵盤チェンバロを教会に運んでの演奏会でした。遠くの方も足を運んでくださり、80人近くでいっぱいになりました。夫を偲びながら優しい音色に惹き込まれました。私が好きな曲は「木の葉の舞」と「モニカのアリアによる11のパーティータ」です。



8月17～18日、教会のサマースクールにスタッフとして参加しました。千歳市の美々川源流部で自然観察会をするために小野有五さんとそこに行けるように大きく伸びた笹狩りをしました。クマが怖いので、笛と鈴を鳴らしながらの作業でした。

美々川に入る急な崖はロープを使って一人ひとりが順番に下りました。道なき道の真下に、こんこんと水が湧き出していました。千歳川放水路問題が起きた時に小野さんらの市民運動で守った美々川との10年ぶりの再会でした。空を見上げると大きな木から木漏れ日が

さしています。子どもたちは美々川の自然を語る小野さん(写真)の話に耳を傾けて、早速、石の間にいるヨコエビを探しました。小さな命が懸命に生きていることを知りました。森から落ちた葉が魚の栄養になります。美々川の美しい自然が残っていて良かったです。



9月17日は中秋の名月。自宅から見ると、円いドームの天文台と兄弟のようでした。主を失った天文台は寂しそうです。月を眺めながら澄生さんが

木星や金星を教えてくれた日を思い出しました。天国からカシオペア座やおひつじ座、ペルセウス座がよく見えますか。(文と写真・樋口みな子)